

日本出身起業家 学校再建に情熱

荒廃した「落ちこぼれ校」からラグビー王者に……。1980年代に人気を集めたドラマ「スクールウォーズ」を思い起こさせる高校が、南太平洋の島国フィジーにある。復活劇をもたらしたのは、日本から移り住んだ起業家だった。



ガニガリさん(48)が円陣で「最後の10分が大事。集中だ」とけきを飛ばした。ひたすら、パスの練習を繰り返す。

校長(62)が練習を見守る。「愛校心を鼓舞している。生徒たちには体力があるの、で、『気持ち』ができれば、仕事は終わったも同然だ」と言う。

言い切った。だが、少し前まで学校の様子は全く違っていた。09年5月、政府は福井県出身でフィジーに移住した谷口浩さん(45)に「学校再建」を依頼した。英語が公用語のフィジーで05年に語学学校を開き、格安留学で数百人の日本人を集める手腕に白羽の矢が立った。学校を訪れた谷口さんは驚いた。水道は出ず、トイレは流れない。グラウンドはでこぼこ。「スクールウォーズ」だったら不良生徒が割るだろう窓ガラスすらなかった」と振り返る。荒れた施設が、生徒や教師のやる気を失わせていた。毎年11月の統一テストの学校全体の成績も「底辺」だった。谷口さんは施設の改修から始めた。深さ約80センチの掘り出し、土を敷き、排水も掘るなど、語学学校の収益から2千万円ほどつぎ込んだ。そして、おおらかなフィジーの生徒たちに規則正しく生活することの大切さを訴えた。

13年、トラさんを校長に招いた。別の高校をラグビーで全国優勝に導いた実績があった。新校長のもと、ラグビーは強豪に。統一テストも昨年は全国162校中6位に躍進した。「規律を持って取り組む姿勢を定着させれば、学ぶ環境ができる」とトラ校長は語る。

ラグビー、学力全国クラスに

フィジー



学校復活の立役者、谷口浩さん

午後4時、まだ強い日差しが照りつけるなか、グラウンドに楕円球を持った若者が集まってきた。15人のうち、11人は裸足。フィジー西部ラウトカのバ・プロビンシャル高校でラグビーチームの練習が始まった。体育教師のニコ・トゥラ

留学受け入れで資金

「鬼校長」の力と同時に学校の復活に貢献したのが、政府が見込んだ谷口さんの経営手腕だった。フィジーの国立学校は教員の給料は国が出すが、運営は地域が担うのが一般的だった。同校は、授業料の未収で運営費が不足。費用の使途も不明朗だった。

高額の費用が壁になっていた。そんな子どもたちを受け入れ、1人年75万円の授業料を運営費に充てている。代わりにフィジー人は授業料を無料にした。藤原泰樹さん(18)は静岡県の高校に1年通ったが、自由に授業を選べないことに不満を感じてフィジーを選んだ。「将来は途上国支援で活動したい」と言う。豊田夏子さん(17)は「日本の女子高生もしてみたいけど、ここで苦勞してよかった」と話した。

生徒たちは地元でホームステイして交流する。山崎円太さん(16)を受け入れるデボラ・ナイバルワンガさん(54)は「自分の息子のようです」と温かだ。日本人との交流でフィジーの生徒も刺激を受けている。政府は後を追うように14年から全国の国立校の授業料を無料に。各校に生徒1人当たり250フィジードル(約1万4千円)を助成する。これを含む国の教育予算は近年は約5億フィジードル。国の予算の2割を占めるが、まだ十分ではない。

そこで期待されるのが民間活力。教育省のケレラ・タロガ副長官は「バ・プロビンシャル高校のような例を奨励したい」と話す。



パスの練習をするラグビーチームの選手たち。多くは裸足だ。いずれもラウトカ、小暮哲夫撮影

運営資金をどう生み出すか……。それが谷口さんの課題だった。だが、今の校内を見渡すと、それをどう解決したかがわかる。校舎では日本人の姿が目につく。日本の中学3年から大学1年にあたる全校生徒604人うち、1200人が日本人留学生なのだ。「日本の学校が合わない」「留学したいが欧米の間に、ミャンマー人やカンボジア人ら数万人が出国する騒ぎになった。」

軍政側は、罰則強化の理由を「人身売買問題への対応」と説明する。不法就労の放置が強制労働や人身売買の温床になっているとの批判があり、米国が6月27日に発表した世界の人身売買をめぐる報告書でも、タイは人身売買撲滅に向けた最低基準を満たしていないと評価された。

だが、低賃金の外国人労働者らに依存してきた漁業や建設業、零細企業などからは一斉に不満の声が上がった。タイには少なくとも300万人以上の外国人労働者がいて、そのうち不法就労者は100万人を超えるとみられているが、実数は分かっていない。

漁業組合関係者は「罰則強化には、とてつもない副作用がある」と反発した。労働許可の手続きが煩雑で費用が高いことも不法就労を招く一因だとし、就労シ

数万人出国 タイ混乱

不法就労の罰則強化延期

タイで軍事政権が不法就労者への罰則を強化し、摘発を恐れたミャンマー人やカンボジア人ら数万人が一斉に帰国する混乱が起きている。タイでは不法就労を含む低賃金の外国人労働者に頼る業種や企業が少なくない。批判を受けて軍政は

急きよ、適用を来年1月からに先延ばしした。6月23日から適用になった新たな罰則は、不法就労が発覚した場合、雇用者に労働者1人につき最高で80万バツ(約270万円)の罰金を科すなどの内容。これを受け、6月下旬の約1週

間、ミャンマー人やカンボジア人ら数万人が出国する騒ぎになった。軍政側は、罰則強化の理由を「人身売買問題への対応」と説明する。不法就労の放置が強制労働や人身売買の温床になっているとの批判があり、米国が6月27日に発表した世界の人身売買をめぐる報告書でも、タイは人身売買撲滅に向けた最低基準を満たしていないと評価された。

だが、低賃金の外国人労働者らに依存してきた漁業や建設業、零細企業などからは一斉に不満の声が上がった。タイには少なくとも300万人以上の外国人労働者がいて、そのうち不法就労者は100万人を超えるとみられているが、実数は分かっていない。

漁業組合関係者は「罰則強化には、とてつもない副作用がある」と反発した。労働許可の手続きが煩雑で費用が高いことも不法就労を招く一因だとし、就労シ

「困った人をつなぐ」

谷口さんとフィジーとの出会いは02年末。1週間の滞在で、人々に毎日のように食事に招かれて温かみに触れた。その年の8月、「白血病で余命半年」と宣告され、結局は誤診と判明。そんな経緯でショックを受けていた心が癒やされた。大好きになったフィジ

ーでの起業を決意した。「困った者同士をつなぐビジネス」が信条だ。語学学校は、留学を費用面で支えていた日本人と、就職難のフィジー人を英語教師として雇ってつないだ。高校運営も「運営が厳しかった学校の生徒と日本の教育に満足できない生徒

出張で訪れた米西海岸オレゴン州のポートランド。土曜日の午後10時過ぎ、ホテルで取材内容を整理していると、「ヒュー」「オー」といった叫び声が聞こえてきた。外に出てみると、繁華街の道路を全裸の男女が威勢よく、次々に自転車に駆けていった。カラーペイントや下着で陰部を隠す人もいたが、若者だけでなく、年配の夫婦もずいぶんばんばんになってペダルをこいでいる。沿道の警察官は立って様子を見ているだけ。参加者は気分が高揚しているのか、立ち尽くしていた私にハイタッチを求めてきた。

この風変わりなイベントは「世界裸自転車ライド」。地元メディアなどによると、今回は千人以上が参加。裸になることで注目を集め、化石燃料への依存を減らし、自転車愛好家の安全策の強化などを訴えるのが目的なんだとか。同様のイベントは英国やカナダなど、約20カ国で開催されているという。

全裸で自転車 なぜ

特派員メモ

◆オレゴン州・ポートランド

日本なら公然わいせつ罪と言われそうだが、参加した黒人男性は「最高の気分だよ」と満足げ。どこを隠すわけでもない堂々とした姿に、見ている私の方が恥ずかしくなっていた。

(石原孝)